《アモーダル・サスペンション》
ラファエル・ロサノ＝ヘメル（2003）
Photo: 伊奈英次

《スカイ・イヤー》
ウスマン・ハック（2004）
Photo: Ai Hasegawa

のプロセスを通して、不特定多数の人々や情報が複雑に接続・連携することで生み出される情報のダイナミズムに対峙し、そこに広がるコミュニケーションを想像的に共有することになる[17]。

携帯電話を介して情報の可視化をパブリックなインタラクションとして展開するもう一つのプロジェクトとして、ロンドンを拠点とする建築家のウスマン・ハックがロンドンで実現した《スカイ・イヤー》（2004）[18]が挙げられる。1000個以上の風船とLEDで形成された雲のような構造体を夜空に浮かべ、その場にいる人々が電話をかけることで電磁波の状態が変動、それに応じて「雲」の色がカラフルに変化し、音としても聴くことができる。携帯電話により自分たちが発する電磁波を感知し「聴き」可視化する空の耳（スカイ・イヤー）を通して人々は、都市を覆うもう一つの「自然」としての情報の流動にあらためて対峙することになる。

モバイル技術がもたらしたネットワーク化による情報の構造的な変化は、もはやビットとアトムという分岐を前提とするのではなく、むしろ実空間が仮想空間的なものの逆流によって規定されていくという世界を生み出しはじめていると思われる。ハックは《スカイ・イヤー》において、電子基板や風船でできた構造体の制作を人々がともに学び交流を行うワークショップとして解放している。また「ローテク・センサーズ・アンド・アクチュエーターズ」プロジェクトにおいては、ブダペストの建築家アダム・S・ソムライ＝フィッシャーとともに、チープな電子玩具を改造しインタラクティヴなシステムを実現するDIYを推進しており、そのまなざしは一貫して人々が楽しみながら自律的に都市や社会と関わっていく実践へと向けられている。

ロサノ＝ヘメルやハックが行っているのは、通常トップダウン・抽象的に表象される都市や情報環境にボトムアップ的な世界を差し込むことである。見慣れた都市空間に、各人が自由にふるまうことで創造性が開示されるオープン・クリエーションの場を一時的に出現させること。それは異なる人々が出会い新たな関係を持ちはじめる可能性を開く、TAZ的実践ともいえる。

モブラボ：PAZの実践

ハキム・ベイは、2003年にTAZに加えて「PAZ（恒常的自律ゾーン）」という言葉を投げかけている[19]。——あらゆる地域・生物圏がPAZとなりうる——彼が夢想気味に語ったPAZとは、自発的なコミューンのような反テクノロジー、反資本主義的な性格を持ち、そこからTAZが形成されるという。一時的ではなく恒常的な自律ゾーンの必然性は、2000年代初頭までの10年に急激に進行した情報資本主義による不可視の領土化——デジタル・ネットワークとバイオ・テクノロジーにおける管理の強化——に対する危機警告とも読める。もはやTAZさえ出現しにくい情報管理の只中で、ぎりぎりの戦略としてPAZが待望されたのではないだろうか。ベイほど煽動的ではないにしろ、ネットワークと持続的に接続された相互再帰的なループの中に存在する「サイボーグ化する私」（ミッチェル、前述書タイトルより）、グローバルな情報・コミュニケーション秩序における再帰性批判としての『情報批判論』（ラッシュ）など、同時期に執筆された書物において、私たちが自ら継続的接続のループ内にとどまりながらもその再帰性に亀裂を入れていく必要性が語られている[20]。

そのような実践の可能性をモバイル環境において示唆する試みとして、ここではあえて「PAZ」を「パーヴェイシヴ・テンポラリー・ゾーン」（分散的自律ゾーン）と読み換えてみたい。「パーヴェイシヴ」とは一般的に、高速無線ネットワークの浸透によりユビキタスにアクセス可能な技術やその状態を表している。そこに「自律ゾーン」という言葉を接続することで、モバイル技術をベースに人々や情報が自律的に連携し合い相乗的に生成されうる予測不可能な分散性を志向するものである。ハワード・ラインゴールドは『スマートモブス』（2003）において、人々が携帯端末を使って連携しはじめた現象（スマートモブス）に対して「アドホックなモバイル情報システムは自己組織的で完全に分散され、高度にダイナミックな究極のP2Pシステムである」[21]という言葉を引用しつつ、自己組織的な創発性を読み取っている。しかし問題は、同書の最後において彼が警告したように、スマートモブ技術が今後「協力の技術になるのか、それとも究極的な偽情報娯楽（ディスインフォテインメント）の装置になるのか」であり、それは私たちが今まさに「何を知り何をなすのかが問題」となってくる。モバイル技術を通して「パーヴェイシヴ」を自律的なゾーンへと奪回し、流動的な状況のダイナミクスに応じてあらゆる場所で人や情報が連携し自律性を散布すること。「PAZ（分散的自律ゾーン）」では情報だけでなく人々の身体的移動や分散性が重要であり、それらの

Mobile Society Review, Vol. 008, Winter 2006, pag. 26, 27, Japan. (japanese)

《アモーダル・サスペンション》
ラファエル・ロサノ＝ヘメル（2003）
Photo: 伊奈英次

《スカイ・イヤー》
ウスマン・ハック（2004）
Photo: Ai Hasegawa

のプロセスを通して、不特定多数の人々や情報が複雑に接続・連携することで生み出される情報のダイナミズムに対峙し、そこに広がるコミュニケーションを想像的に共有することになる[17]。

携帯電話を介して情報の可視化をパブリックなインタラクションとして展開するもう一つのプロジェクトとして、ロンドンを拠点とする建築家のウスマン・ハックがロンドンで実現した《スカイ・イヤー》（2004）[18]が挙げられる。1000個以上の風船とLEDで形成された雲のような構造体を夜空に浮かべ、その場にいる人々が電話をかけることで電磁波の状態が変動、それに応じて「雲」の色がカラフルに変化し、音としても聴くことができる。携帯電話により自分たちが発する電磁波を感知し「聴き」可視化する空の耳（スカイ・イヤー）を通して人々は、都市を覆うもう一つの「自然」としての情報の流動にあらためて対峙することになる。

モバイル技術がもたらしたネットワーク化による情報の構造的な変化は、もはやビットとアトムという分岐を前提とするのではなく、むしろ実空間が仮想空間的なものの逆流によって規定されていくという世界を生み出しはじめていると思われる。ハックは《スカイ・イヤー》において、電子基板や風船でできた構造体の制作を人々がともに学び交流を行うワークショップとして解放している。また「ローテク・センサーズ・アンド・アクチュエーターズ」プロジェクトにおいては、ブダペストの建築家アダム・S・ソムライ＝フィッシャーとともに、チープな電子玩具を改造しインタラクティヴなシステムを実現するDIYを推進しており、そのまなざしは一貫して人々が楽しみながら自律的に都市や社会と関わっていく実践へと向けられている。

ロサノ＝ヘメルやハックが行っているのは、通常トップダウン・抽象的に表象される都市や情報環境にボトムアップ的な世界を差し込むことである。見慣れた都市空間に、各人が自由にふるまうことで創造性が開示されるオープン・クリエーションの場を一時的に出現させること。それは異なる人々が出会い新たな関係を持ちはじめる可能性を開く、TAZ的実践ともいえる。

モブラボ：PAZの実践

ハキム・ベイは、2003年にTAZに加えて「PAZ（恒常的自律ゾーン）」という言葉を投げかけている[19]。——あらゆる地域・生物圏がPAZとなりうる——彼が夢想気味に語ったPAZとは、自発的なコミューンのような反テクノロジー、反資本主義的な性格を持ち、そこからTAZが形成されるという。一時的ではなく恒常的な自律ゾーンの必然性は、2000年代初頭までの10年に急激に進行した情報資本主義による不可視の領土化——デジタル・ネットワークとバイオ・テクノロジーにおける管理の強化——に対する危機警告とも読める。もはやTAZさえ出現しにくい情報管理の只中で、ぎりぎりの戦略としてPAZが待望されたのではないだろうか。ベイほど煽動的ではないにしろ、ネットワークと持続的に接続された相互再帰的なループの中に存在する「サイボーグ化する私」（ミッチェル、前述書タイトルより）、グローバルな情報・コミュニケーション秩序における再帰性批判としての『情報批判論』（ラッシュ）など、同時期に執筆された書物において、私たちが自ら継続的接続のループ内にとどまりながらもその再帰性に亀裂を入れていく必要性が語られている[20]。

そのような実践の可能性をモバイル環境において示唆する試みとして、ここではあえて「PAZ」を「パーヴェイシヴ・テンポラリー・ゾーン」（分散的自律ゾーン）と読み換えてみたい。「パーヴェイシヴ」とは一般的に、高速無線ネットワークの浸透によりユビキタスにアクセス可能な技術やその状態を表している。そこに「自律ゾーン」という言葉を接続することで、モバイル技術をベースに人々や情報が自律的に連携し合い相乗的に生成されうる予測不可能な分散性を志向するものである。ハワード・ラインゴールドは『スマートモブス』（2003）において、人々が携帯端末を使って連携しはじめた現象（スマートモブス）に対して「アドホックなモバイル情報システムは自己組織的で完全に分散され、高度にダイナミックな究極のP2Pシステムである」[21]という言葉を引用しつつ、自己組織的な創発性を読み取っている。しかし問題は、同書の最後において彼が警告したように、スマートモブ技術が今後「協力の技術になるのか、それとも究極的な偽情報娯楽（ディスインフォテインメント）の装置になるのか」であり、それは私たちが今まさに「何を知り何をなすのかが問題」となってくる。モバイル技術を通して「パーヴェイシヴ」を自律的なゾーンへと奪回し、流動的な状況のダイナミクスに応じてあらゆる場所で人や情報が連携し自律性を散布すること。「PAZ（分散的自律ゾーン）」では情報だけでなく人々の身体的移動や分散性が重要であり、それらの

Mobile Society Review, Vol. 008, Winter 2006, pag. 26, 27, Japan. (japanese)